

カール・メンガーのウィーンをたずねて Visiting Carl Menger's Wien

木村 雄一
KIMURA Yuichi

一橋大学社会科学古典資料センターは、その名の通り 15 世紀～20 世紀の社会科学の古典資料を一括管理している。大きく五つのコレクションを有しているが、中でも柱となるのが、「メンガー文庫」である。カール・メンガーは、第一次大戦後のインフレの中で 1921 年の 2 月 26 日、妻子に「その蔵書を売り払って生活するように」と言い残して亡くなった¹⁾。メンガー文庫の購入は、1922 年当時 29 歳でベルリン留学中であった大塚金之助の発案であったが、メンガー家との直接交渉の末、欧米の複数ライバルを排しての購入であった²⁾。

メンガーは、ジェヴォンズやワルラスとともに、古典派経済学の労働価値説やその流れを汲む費用価値説に対抗して、需要面を重視した主観的価値説（限界効用理論）を提示したことで著名である。学説史上「限界革命」と呼ばれるが、メンガーの経済学を単なる限界効用理論と位置づけることは適切と言えない。なぜならメンガーは「主観主義」の経済学を徹底させた経済学者としてその特徴を求める解釈が強くなっているからである。たとえば、シュトライスラーは「メンガーには独自の偉大さがあった。それは彼が限界主義を創造したと同時に、限界主義を超克している点である」³⁾と述べている。メンガーの経済学は時空を越えて、新古典派経済



(ウィーン大学)



(カール・メンガーのレリーフ)

¹⁾ 八木紀一郎『ウィーンの経済思想』（ミネルヴァ書房、2006年）、13ページ。

²⁾ 岩本吉弘「メンガー文庫と大塚金之助」『学鏡』93巻4号、1996年、26-31ページ。

³⁾ エーリッヒ・シュトライスラー「オーストリア学派と限界主義」、コリソン・ブラック他編著 岡田純一・早坂忠訳『経済学と限界革命』（日本経済新聞社、1975年）所収、131ページ。

学批判の「ノンワルラシアン・エコノミクス」として、現代の進化的経済学の一潮流である「ネオ・オーストリアン」に引き継がれている。

今回私は、*ESHET-JSHET 1st Meeting*に参加後⁴⁾、メンガーと縁の深いウィーンをたずねる機会を得た⁵⁾。今日のウィーンは、ハプスブルク帝国の遺産が詰まったシュテファン寺院を中心とする旧市街、ヨーロッパの名画を擁する美術館、ユーゲントシュティルの建築、洒落たカフェ、楽聖たちの足跡を有した華麗なる都として知られているが、メンガーの生きた19世紀後半のウィーンは、オーストリア自由主義の勃興と挫折にあった⁶⁾。メンガーが改革の希望を託した皇太子ルドルフが1889年に自殺を遂げたとき、メンガーは「私の人生の希望が失われた」と日記に記した⁷⁾。ペシミズムを募らせていくメンガー。私はメンガーと関係するウィーンの地を廻ってみた。

メンガーが講じたウィーン大学は、かつて城壁が聳えていた「リング」とよばれる環状道路の西北に位置する（Schottentor/Universität）。ウィーン大学は、1365年にルドルフ四世によって創立されたドイツ語圏で最古の伝統を誇る由緒ある大学で、多数の著名な学者を輩出している。このウィーン大学の回廊を歩くと、この大学で教鞭を執った多くの学者たちのレリーフや



(メンガーの墓所)

⁴⁾ 2006年12月17-20日、Nice-Sophia-Antipolis に於いて、日本学術振興会二国間交流事業 ESHET-JSHET 共同セミナー「経済思想史における知識・市場・経済統合」が開催された。

⁵⁾ この場を借りて、ウィーンの研究会でご一緒させて頂いたウィーン学団研究所所長 Friedrich Stadler 氏やウィーン大学経済学部 Milford 氏、東京外国語大学中山智香子氏、龍谷大学小峯敦氏、小樽商科大学江頭進氏に感謝申し上げます。

⁶⁾ カール・ショースキー著安井琢磨訳『世紀末ウィーン』（岩波書店、1983年）。

⁷⁾ 八木紀一郎『ウィーンの経済思想』、前掲、12ページ。

胸像と会うことができるが、そこで1929年弟子たちの手によって遺されたメンガーのレリーフを発見することができる。このレリーフを眺めていると、激動の時代を生きたメンガーがウィーン大学や弟子たちに何を託そうとしたのかと深く考えさせられる。その感慨は、センター見学者に必ず紹介するメンガーのデスマスクを見るとき印象と強く重なり合う。

リングの外側の11区 Simmeringer にウィーンの中央墓地（Zentralfriedhof）が位置している。1874年ウィーンの発展と衛生学的な観点から、市内の5つの墓地を集めて開設したそうだが、正面第2門に入って左手の高い塀に沿ってしばらく歩くとメンガーの墓所（「0」地区）がある⁸⁾。写真のように、それは背が高く質素な建造物であった。私は、中央墓地の前で売られている献花を購入して、そっとメンガーの墓所の前に供えた。一橋大学社会科学古典資料センターが「メンガー文庫」を貴重書として大切に預かっている旨を伝えながら。

（一橋大学社会科学古典資料センター助手）

⁸⁾ ちなみにメンガーの弟子であるベーム・パヴェルクの墓も同じ中央墓地にある。楽聖たちの眠る32Aのすぐ隣32Bに位置する。